

経営

「世界基準」は本当に正しいのか？

組織の円滑な運営に不可欠な会計。その歴史を探ることで、現代のより良い企業経営や会計制度のあり方に迫る。

17世紀のオランダで簿記に大変化が訪れた

企業はもちろんのこと、自治体や非営利組織においても、お金を管理することは組織のスムーズな運営のために欠くことのできない要件です。そこで人間は、さまざまな簿記や会計のしくみを考案してきました。現代の会計の基本となっている**複式簿記**が登場したのは、諸説がありますが中世イタリアだと考えられています。その後の大航海時代には、ネーデルラント（現在のオランダとベルギーを中心とした地域）が欧州の商業の中心地となりました。このとき、簿記の世界に大きな変化が訪れたのです。シモン・ステフィンという人物が提唱したとされた「期間損益計算」という概念であり、これこそが私の研究の出発点でした。

期間損益計算という概念は読んで字のごとく、ある一定の期間内の損益を計算する考え方です。現在の日本では、多くの会社が4月から翌年の3月を「一定の期間」と定め、決算を行っています。21世紀に暮らす私たちからすれば、極めて自然なことと思えるかもしれませんが、ところがこの時代は違ったのです。当時の商人たちは、1回の航海ごとに出資を募り、船が帰港すると商品を売りさばって出資分の払い戻しと利益の分配を行っていました。この時点で組織は解散です。そんな中に登場したのが、後に日本にも大きな影響を与えることになる**連合東インド会社**（VOC）です。VOCは世界初の株式会社といわれています。そして、会計の歴史上で重要なのが、解散を前提としない継続企業だということです。

継続が前提ですから、VOCには「いつ、損益を計算するのか」という問題が生まれます。そこで、ある時点で区切って損益を把握しようという発想が生まれ、それを可能にする簿記のしくみが考えられたのです。それこそ、期間損益計算だとされたのです。

実は、私はこういった構図はあまりにでき

ぎだ、VOCの出現は期間損益計算だけでなく、むしろ、物的資本概念の形成に影響を与えたのではないかと考えて研究を続けてきましたが、いずれにしても、VOCが会計に与えたインパクトは大きかったということです。

簿記・会計のしくみは社会に応じて変化する

VOCの誕生と期間損益計算の誕生が教えてくれるものは、社会の変化と簿記や会計の変化は密接に関係しているということです。裏を返せば、社会を見つめることなく簿記や会計だけを見つめても、より良い組織運営はできないということです。このことを現代の日本に当てはめて考えてみましょう。

ご存知のとおり、経済のグローバル化は加速するばかりです。国際的な取引や投資はさらに活発化するでしょう。ところが、取引や投資の判断材料となる経営状況を知るための資料、すなわち決算書をはじめとした会計制度は、国ごとに異なります。「これでは不便だ」という声が上がります。世界で統一しようという動きがあります。**IFRS**（イファースあるいはアイファース／国際財務報告基準）と呼ばれるもので、欧州が中心となって設定され欧州企業では2005年から強制適用されており、日本でも2015年3月期からの強制適用が検討されていました。

しかし、欧州がIFRSのような会計制度を生み出した背景には、欧州経済、ひいては欧州という地域自体の歴史があるのです。それを、歴史や文化がまったく異なる日本へ、ある日突然当てはめたところで期待どおりに機能してくれるのか？答えはNoです。このことを多くの会計学者や企業も懸念し、2015年からの強制適用は見送られました。今後、IFRSをめぐるさらには議論がされます。その際、簿記や会計の変遷とその社会的背景というのは、重要な視点になるはずで、簿記・会



橋本先生の著書、「ネーデルラント簿記史論」。ネーデルラントといっても、ピンと来ないかも知れないが、現在のオランダとベルギーを中心とした地域であり、17世紀にはここが世界経済の中心地であった。こうした社会的背景のもと、複式簿記は大きく革新した。



Point of The Lecture

本文中に出てくる重要なキーワードや参考文献。これらによって、より深く先生の研究が伝わるので、独自に調べてみよう。

☆Key Word

複式簿記 / 連合東インド会社 / IFRS

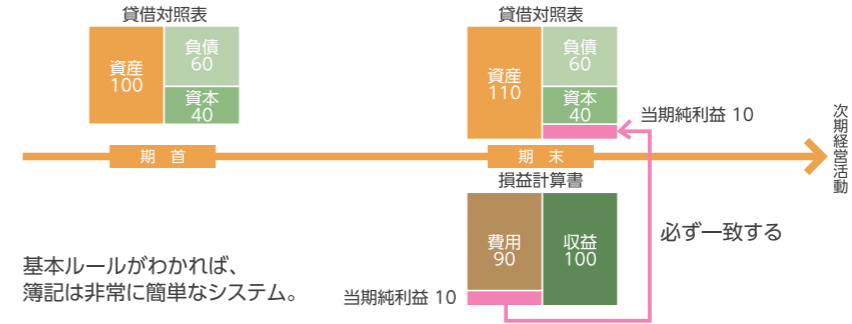
○Reference

『**稲盛和夫の実学 経営と会計**』稲盛 和夫 著 日経ビジネス人文庫
 著者は、アメリカ経営で有名な京セラやKDDIの創業者。最近では日本航空の再建にも関わった。企業経営における会計の重要性について実感できる一冊。
 『**ザ・ラストバンカー 西川善文回顧録**』西川 善文 著 講談社
 著者は三井住友銀行の元頭取で、日本郵政の前社長。社会的な出来事と自身の足取りを振り返る中で、会計的な記述が随所に登場する。スリリングな企業経営の舞台裏をのぞくことのできる一冊。
 『**IFRSに異議あり**』岩井 克人・佐藤 孝弘 著 日本経済新聞社
 IFRSの問題点や、日本がどのような会計制度をめざしていくべきかを論じた一冊。



簿記のしくみを知っておこう

複式簿記とは、個人や法人が行った、経済取引を二面的に記録する方法。



計の歴史を知ることは、経済や企業経営のより良い未来へ向かったアプローチでもあるのです。

複式簿記を使ってビジネスを複眼的にとらえる

簿記・会計を研究し、大学で指導していると「会計って難しい」という声をしばしば耳にします。また「数学が苦手なので……」と言って尻ごみしてしまう人も出会います。そんなとき私は「会計は人間活動の記録ですよ」と説



◆橋本 武久 教授 ◆HASHIMOTO Takehisa

博士（経営学）。研究テーマは「簿記・会計学の歴史的研究」「わが国会計制度の史的・現代的な研究」。大学を中退して家業を手伝うようになり、その際に簿記や会計知識の有効性を実感。25歳で大学へ戻り、会計の専門的な勉強と研究を始める。もともと歴史好きであったことから、研究テーマも会計と歴史を関連づけたもの。趣味は読書。「本を読まないで眠れない」というほどの読書好き。日本全国やオランダへの出張が多い中、休日は子どもと過ごすことが何よりの楽しみ。大阪府立長野北高校OB。

明しています。ゴールはあくまでも、期間内の損益や資産の状況を目に見えるようにすることです。それをより簡単で、より社会や自分たちのビジネスに合わせてわかりやすく改良してきたのが、現在の会計です。

現在の会計は複式簿記が基本になっていますが、複式簿記は、お金の出入りを「原因と結果」の2つの視点から記録する簿記だと説明されることもあります。これは、物事を常に2つの角度から眺めるという柔軟な思考や複眼的な思考につながります。また、ある事象が引き起こす結果を予測したり、既に起こった出来事の原因を探る力にもつながります。これは、リスク管理能力や課題発見能力と言い換えることができます。こう考えると、なぜ会計が文系、しかも経営学部に含まれているかをわかってもらえるのではないのでしょうか。会計の力をつけるということは、ビジネススキルを磨くことそのものなのです。

株式会社の本質を会計から見つめていく

会計をめぐるのは、しばしば不正経理など企業の不祥事にまつわるニュースが飛び込んできます。これは日本だけに限ったことではなく、世界を見渡しても同じです。いったいどうしてなのでしょう。

記録

その理由の一つとして、やはり社会の変化が挙げられます。改良を重ねて時代に即したものと変わってきた会計制度も、さらに時代が変われば、時代に追いつかず制度疲労が起ってしまうのです。誕生した瞬間に過去のものになるという宿命を、会計制度は背負っているのかもしれない。それは考えようによっては、会計とは常に未来を見つめ、変化を恐れずにチャレンジしていくという、ダイナミックな学問であるともいえます。このとき、歴史や社会経済的背景という視点は大きな意味を持つと考えています。私自身も、「これから先の会計制度」に向けて歴史的研究を深め、提言していこうと考えています。

そしてもう一つチャレンジしたいことが、私の研究の原点でもあるネーデルラントで生まれた「株式会社」という存在に関する研究です。株式会社が本当に理想的な企業のあり方なのか？重大な問題を私たちは見落としてしまっていないか？代わりとなる企業のあり方は存在しないのか？それらの疑問に会計面から迫り、株式会社の本質を解き明かしたいと考えています。

👏ポイント！ 高校生のための経営学

簿記ほどお得な資格はない？！

会計を学ぶうえでの入門資格といえば、日商簿記3級。この資格を取得するための勉強することによって、日経新聞の記事やテレビの金融関係のニュースはほとんど理解できるようになります。企業に入れば、経理や金融の仕事以外でもこれらの知識は必須になります。それがわずかな試験勉強のための期間と費用で身に付けられるのですから、こんなにお得な資格はありません。私が担当するゼミでは、もう一つ上のランクである2級取得を全員の目標としています。さらに、経理・会計のプロをめざす人は、税理士や公認会計士などの資格にもチャレンジしています。ゼミとしては、そういった人を対象とした特別授業も設け、バックアップしています。どのような職業に就くにしても、会計知識がもたらしてくれる備えの考え方やバランスの考え方、すなわち「アカウンティング・マインド」は大いに役立つはずです。